

CLASSICAL STATISTICAL SIMULATION OF QUANTUM FIELD THEORY

平山貴之 (中部大学)

素粒子現象論研究会2020@大阪市立大学

arxiv : 1912.06148

量子論と等価な確率理論を構成した。

すなわち、この確率理論で期待値を計算すると、量子論の相関関数と同じ値になる。

$$\langle \phi(x_1) \phi(x_2) \dots \phi(x_n) \rangle = \langle \phi(x_1) \phi(x_2) \dots \phi(x_n) \rangle_{QFT}.$$

Stochastic quantization との比較は後で行います。

量子論の真空の様子を考える。

ゼロ点エネルギーがあり、粒子が常に(ランダムに)生成消滅を繰り返している。



エーテル？

古典論でsourceを入れて、

$$(\square + m^2 - i\varepsilon) \phi(x) = J(x)$$

$J(x)$ をランダムノイズ(確率変数)にとることで真空からの生成消滅を現わせないか？

$$\langle \phi(x_1) \phi(x_2) \dots \phi(x_n) \rangle = \langle \phi(x_1) \phi(x_2) \dots \phi(x_n) \rangle_{QFT}$$

このままだと答はNoだが、 $J(x)$ をcomplex Gaussian noiseにして

$$(\square + m^2 - i\varepsilon) (\phi(x) + iJ^*(x)) = J(x)$$

とするとYes.

相互作用があっても同様に

$$(\square + m^2 - i\varepsilon) (\phi(x) + iJ^*(x)) = J(x) - \lambda\phi^3(x)$$

とすると、摂動展開で↓を証明できる。

$$\langle \phi(x_1) \phi(x_2) \dots \phi(x_n) \rangle = \langle \phi(x_1) \phi(x_2) \dots \phi(x_n) \rangle_{QFT}.$$

相互作用の形によらず、複素スカラー場、フェルミオン、ゲージ場の場合も証明できる。

$$(\square + m^2 - i\varepsilon) (\phi(x) + iJ^*(x)) = J(x) \Rightarrow \phi(x) = \left[\frac{i}{\hbar} \int D_F(x-y) J(y) dy \right] - iJ^*(x)$$

確率変数は、 $J(x)$ を complex Gaussian noise

$$\langle J(x) \rangle = 0 \quad , \quad \langle J(x) J^*(y) \rangle = \sigma^2 \delta^{(4)}(x-y)$$

$\phi(x_1)\phi(x_2)$ の期待値を計算するとクロス項が残り、 $\sigma^2 = \frac{\hbar}{2}$ とすれば

$$\langle \phi(x_1) \phi(x_2) \rangle = D_F(x_1 - x_2)$$

n点関数で $\langle \phi(x_1) \phi(x_2) \dots \phi(x_n) \rangle = \langle \phi(x_1) \phi(x_2) \dots \phi(x_n) \rangle_{QFT}$ が成り立つ。

数字的には確率微分方程式の形をしている。

先程のフリーの場合の解を0次にとり

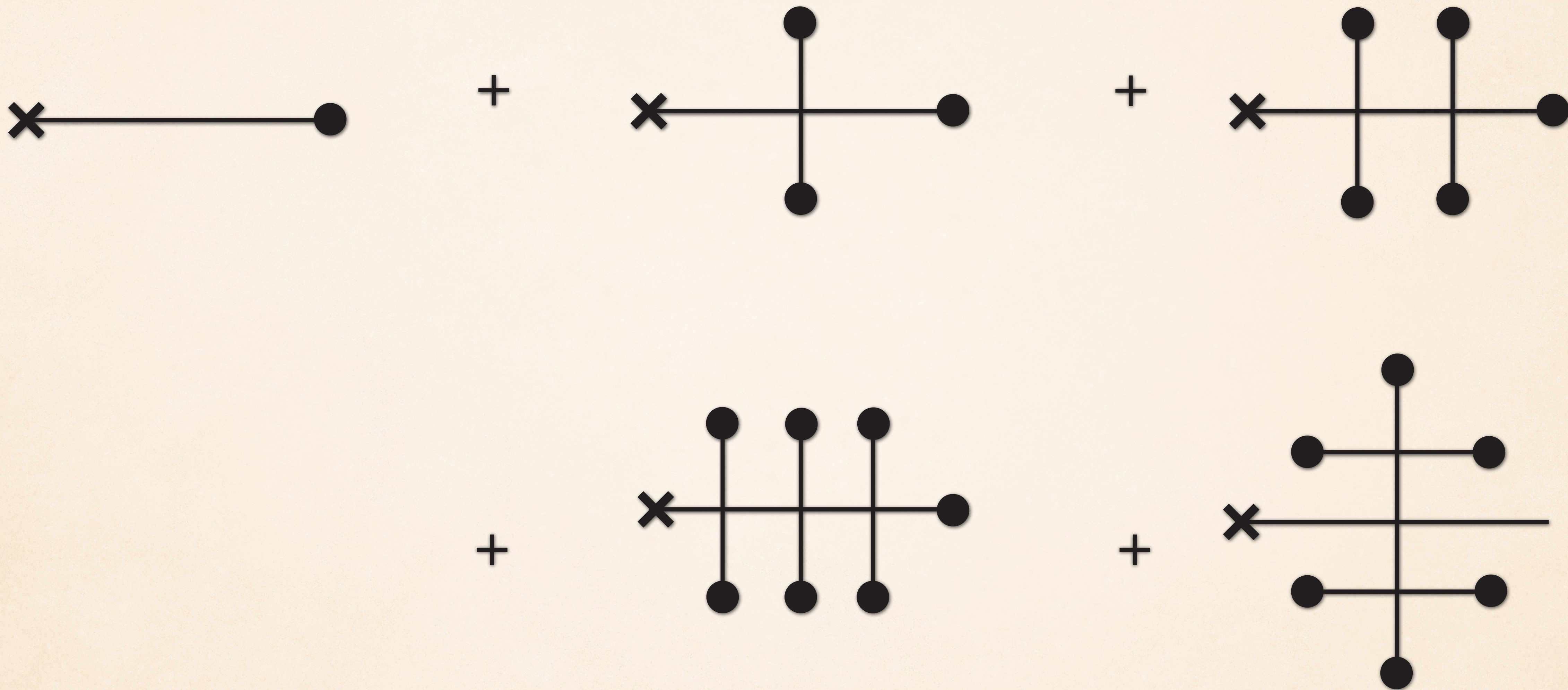
$$(\square + m^2 - i\varepsilon) (\phi(x) + iJ^*(x)) = J(x) + \mathcal{L}'_I \Rightarrow \phi(x) = \phi_0(x) + \frac{i}{\hbar} \int D_F(x-y) \mathcal{L}'_I(y) d^4y$$

$$\phi_0(x) = \left[\frac{i}{\hbar} \int D_F(x-y) J(y) dy \right] - iJ^*(x)$$

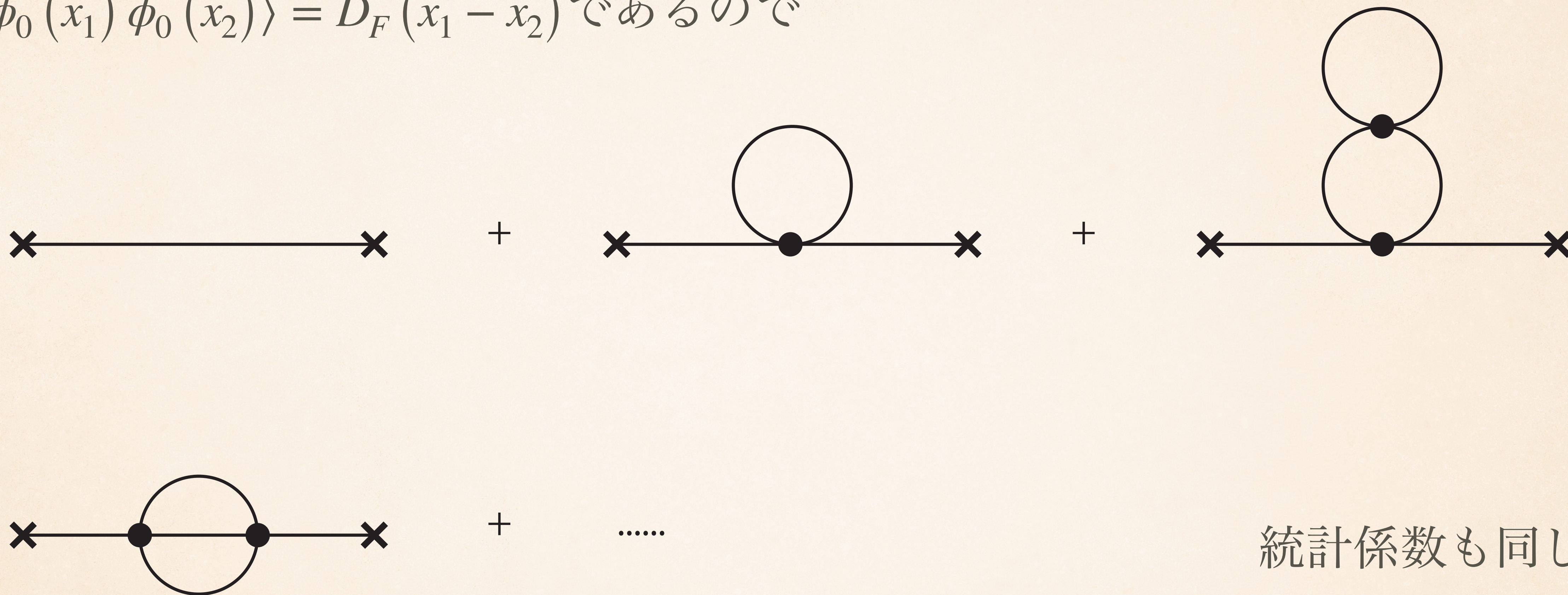
これを摂動展開し、 $\phi(x) = \phi_0(x) + \phi_1(x) + \dots$

n次解をグラフ的に表現すると

$$\phi(x) = \phi_0(x) + \phi_1(x) + \dots$$



$\langle \phi(x_1) \phi(x_2) \rangle = \langle \phi_0(x_1) \phi(x_2) \rangle + \langle \phi_1(x_1) \phi_0(x_2) \rangle + \dots$ は
 $\langle \phi_0(x_1) \phi_0(x_2) \rangle = D_F(x_1 - x_2)$ であるので



統計係数も同じ。

$$\langle \phi(x_1) \phi(x_2) \dots \phi(x_n) \rangle = \langle \phi(x_1) \phi(x_2) \dots \phi(x_n) \rangle_{QFT}.$$

◆ Stochastic quantization (確率過程量子化)

◆ ミンコフスキー空間ではComplex Langevin equation, τ は架空の時間.

$$\diamond \frac{\partial}{\partial \tau} \phi(x, \tau) = i\hbar \left[(\square + m^2 - i\varepsilon) \phi(x, \tau) + \lambda \phi^3(x, \tau) \right] + J(x, \tau)$$

◆ $J(x, \tau)$ は complex Gaussian noise. 十分ノイズの中を浸ると量子的振る舞いになり、

$$\text{limit}_{\tau \rightarrow \infty} \langle \phi(x_1, \tau) \phi(x_2, \tau) \dots \phi(x_n, \tau) \rangle = \langle \phi(x_1) \phi(x_2) \dots \phi(x_n) \rangle_{QFT}$$

- ◆ 量子論を計算する新しい方法。
- ◆ 複素スカラー、フェルミオン、ゲージ場もOK。
- ◆ サイン問題がない。架空時間がない。
- ◆ が、摂動論に頼っているので、非摂動効果？真空がたくさんあると？
- ◆ 量子的世界に対して新しい知見？
- ◆ 量子重力？

ご静聴ありがとうございました。

もう少し詳しく知りたいな、と思ったらセミナーに呼んでください。